



Title	コリャーク語の与格名詞をめぐる諸現象について : 充当相、S=A 交替、授与動詞
Author(s)	呉人, 恵
Citation	北方言語研究, 9, 13-29
Issue Date	2019-03-15
DOI	https://doi.org/10.14943/88220
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73726
Type	departmental bulletin paper
File Information	02_kurebito_megumi.pdf



コリャーク語の与格名詞をめぐる諸現象について — 充当相、S=A 交替、授与動詞 —*

呉 人 恵
(富山大学)

キーワード: コリャーク語、与格名詞、充当相、S=A 交替、授与動詞

1. はじめに

本稿では、コリャーク語 (Koryak: チュクチ・カムチャツカ語族) の与格名詞をめぐるいくつかの現象を考察する。具体的には、受益者が与格で現れる **Benefactive** の充当相を、被動作者が与格で現れる S=A 交替、充当相同様に受益者が与格で現れる授与動詞文とそれぞれ比較する。それにより、コリャーク語の充当相の輪郭を明確にする。

まず、充当相と S=A 交替について見る。両者は同じく、絶対格を取る名詞項を前景化させるための統語操作であるが、派生の方向が違う。すなわち、充当相は、副次項である斜格名詞を主要項 (目的語) に昇格させ、結合価の増加を引き起こす手段である。したがって、動詞は他動詞活用する。本稿の考察対象である **Benefactive** の充当相では、与格の受益者が絶対格に昇格し、目的語となる。具体例を見る。(1a) はもとの自動詞文、(1b) は充当相化した他動詞文である。

- (1) a. enniw-Ø yəmk-ə-ŋ ənnəjet-i-Ø.
uncle-ABS.SG 1SG-E-DAT fish-PF-3SG.S
b. ənniv-ə-ne-k yəmmo ine-ənnəjet-i-Ø.
uncle-E-AN.SG-LOC(ERG) 1SG.ABS 1SG.O-fish-PF-3SG.A
「叔父は私に魚を釣ってきてくれた」

一方、S=A 交替は、反対に主要項を斜格に降格させ、結合価の減少を引き起こす手段である。具体例を見る。(2a) は、もとになる他動詞文であり、他動詞主語は具格 (能格)、目的語は絶対格で現れている。(2b) では、他動詞主語が具格から絶対格に昇格して自動詞主語になると同時に、目的語が斜格に降格し、動詞は逆受動接尾辞 **-tku** が付加されることによって自動詞化する。なお、「子供」を意味する名詞語幹の母音が、(2a) では *kəmiŋ*, (2b) では *kəmeŋ* と異なるのは、母音調和による (コリャーク語の母音調和については Kurebito 2001

* 本稿は、科学研究費基盤研究 (B) (一般)「北方危機諸言語の形成プロセスの解明に向けたネットワーク強化」(18H00665) の研究成果のひとつである。S=A 交替に関するデータは、呉人(2014) に依拠する。充当相ならびに授与動詞に関するデータは、主に 2018 年 9 月 26 日～10 月 1 日にロシア連邦ハバロフスク市においておこなったコリャーク語チャヴチュヴァン方言の聞き取り調査によって収集したが、併せて Kurebito (ed.) (2014, 2016, 2017, 2018) も補完的資料として利用した。調査には、Ajatginina Tat'jana Nikolaevna 氏 (1955 年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第 5 トナカイ遊牧ブリガード生まれ、女性) にコンサルタントとして協力していただいた。ここに記して謝意を表したい。また、本稿執筆にあたってお二人の匿名査読者の方から非常に有益なご指摘をいただいたことにも、心から感謝を申し上げたい。

を参照のこと)。

- (2) a. *ecyi el'ʕa-ta k-ə-ʕejɲew-ŋ-ə-ni-n kəmiŋ-ə-n.*
 now woman-INS(ERG) IPF-E-call-IPF-E-3SG.A-3SG.O child-E-ABS.SG
 b. *ecyi el'ʕa-Ø k-ə-ʕejɲev-ə-tku-ŋ-Ø kəmeŋ-ə-ŋ.*
 now woman-ABS.SG IPF-E-call-E-AP-IPF-3SG.S child-E-DAT
 「今、女は子供を呼んでいる」

この例をみるかぎり、(2b) には逆受動化接尾辞 *-tku* が付いていることから、派生の方向が (2a) ⇒ (2b) で S=A 交替であることは疑いない。ところが、次の (3a)(3b) のような自他同形動詞 (*labile verb*) による自動詞文と他動詞文を見ると、充当相の (4a)(4b) と一見、統語的ふるまいが同じように見え、S=A 交替なのか充当相なのかの判別がつかない。

- (3) a. *əlla-Ø valom-e-Ø kəmeŋ-ə-ŋ.*
 mother-ABS.SG listen-PF-3SG.S child-E-DAT
 b. *əllʕ-a kəmiŋ-ə-n valom-ne-n-Ø.*
 mother-INS(ERG) child-E-ABS.SG listen-3SG.A-3SG.O-PF
 「母は子どもの言うことを聞いた」

- (4) a. *əlla-Ø kukejv-i-Ø kəmeŋ-ə-ŋ.*
 mother-ABS.SG cook-3SG.S-PF child-E-DAT
 b. *əllʕ-a kəmiŋ-ə-n kukejv-ə-ni-n-Ø.*
 mother-INS(ERG) child-E-ABS.SG cook-E-3SG.A-3SG.O-PF
 「母は子供のために料理した」

このことから、これまで、コリヤーク語と同系のチュクチ語 (*Chukchi*) について、充当相は自他同形動詞の S=A 交替と機能的に酷似しているとする指摘 (Dunn 1999) や、同じ統語操作であるかのように扱う向き (Spencer 1995) が散見される。しかし、両者の異同を詳細に比較検討したものは、管見の限り見あたらない。そこで本稿では、このような一見した類似性にもかかわらず、(3a)(3b) は S=A 交替、(4a)(4b) は充当相であることを指摘する。

次に、与格を取る受益者の充当相と授与動詞を見る。授与動詞は、与格を受益者（間接目的語）として取り、Dative Shift、さらに研究者によっては充当相の一例として取り上げられることがある (Baker 1988)。コリヤーク語の *jəl* 「与える」、*nqeviv* 「(贈りものとして) 与える」などの授与動詞では、間接目的語は与格を取り、直接目的語は絶対格を取る。これは、たとえば、*nɲiv* 「送る」、*jet* 「持ってくる」、*lle* 「持っていく」といったモノの移動を引き起こす移動動詞のふるまいと同じである。具体例を見る。(5) は授与動詞 *nqeviv* 「贈る」、(6) は *lle* 「持っていく」の例である。

- (5) vava-na-k kəmeŋ-ə-ŋ ye-nqeviw-linet-Ø mitʃajina-t
 granma-AN.SG-LOC(ERG) child-E-DAT RES-give-3DU.O-3SG.A beautiful-ABS.DU
 peŋke-t.
 hat-ABS.DU

「おばあさんは子どもに2つの美しい帽子をあげた」

- (6) vava-na-k kəmeŋ-ə-ŋ ye-lle-linet-Ø mitʃajina-t
 granma-AN.SG-LOC(ERG) child-E-DAT RES-carry-3DU.O-3SG.A beautiful-ABS.DU
 peŋke-t.
 hat-ABS.DU

「おばあさんは子どもに2つの美しい帽子を持って行った」

英語においても、give と send がいずれも Dative Shift において同じふるまいをすることは周知のとおりである (e.g. She gave a book to me. ⇒ She gave me a book.; She sent a book to me. ⇒ She send me a book.). しかし、本稿では、コリャーク語では両者はこのように一見類似しているにもかかわらず、その統語的ふるまいや充当相形成に関して違いがあることを指摘する。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節では、先行研究における充当相に関する定義に照らしてコリャーク語の充当相の特質を示したうえで、受益者の充当相構文を中心に記述する。第3節では、受益者の充当相を被動作者が与格で現れる自他同形動詞の S=A 交替と比較し、両者の違いについて論証する。第4節では、授与動詞における与格で現れる受益者のふるまいを観察し、充当相のそれとの違いについて論証する。以上の考察を通して、コリャーク語の受益者の充当相の輪郭を明確にする。

なお、本稿で対象とするのは、ロシア連邦マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区に分布するコリャーク語チャヴチュヴァン方言 (Cawcəvan) である。ただし、他の方言との比較には言及しないため、以下、「コリャーク語」によりチャヴチュヴァン方言を表わす。

2. コリャーク語の充当相

2.1. 位置づけ

上述のとおり、充当相は、斜格を取る副次項が主要項である目的語に昇格し、他動詞文として顕現する現象として捉えられる。Spencer (1995:446) はこれを次のように公式化している。

(7) Applicative construction

a. of intransitive verb

Subj V-intr P + NP ⇒

Subj V-P-tr NP(=Obj)

b. of transitive verb

Subj V-tr NP2(=Obj) P + NP3 ⇒
 Subj V-tr NP3(=Obj) NP2(=‘frozen’ Obj)

しかし、充当相のさらに厳密な定義については、研究者により見解が分かれる。特に問題となるのは、動詞の側で明確な充当相化の標示がない場合を充当相と認めるかどうかである。たとえば、Baker (1988:10) は、(8a)(8b) のような動詞に充当相の明示的な標識がない Dative Shift の例も充当相の一種として認めている。

- (8) a. I gave my favorite cookie to Joey.
 b. I gave Joey my favorite cookie.

チュクチ語を扱った Spencer (1995) も、Baker (1988) の定義にしたがい、動詞の側に明確な充当相の標示がないが、斜格が絶対格に昇格している文を充当相構文として扱っている。

一方、Polinsky (2005) は、充当相は通常、目的語が追加されたことが動詞の側で明確に標示されているものに限るのが通例であるとし、Dative Shift は、基本的な充当相による交替とはみなしていない。Peterson (2007) も同様に、充当相を動詞の側に明確な標示がある場合に限定している¹。

これらの見解に照らして、コリャーク語の場合を考えてみる。(9) は (4) で見た自動詞 kukejv 「料理する」 の例である。

(9)=(4)

- a. əlla-Ø kukejv-i-Ø kəmeŋ-ə-ŋ.
 mother-ABS.SG cook-PF-3SG.S child-E-DAT
 b. əllɬ-a kəmiŋ-ə-n kukejv-ə-ni-n-Ø.
 mother-INS(ERG) child-E-ABS.SG cook-E-3SG.A-3SG.O-PF
 「母は子供のために料理した」

(9b) の動詞に注目すると、専用の充当相マーカ―はない。しかし、A と O の 2 項の人称標示がなされていることから、他動詞活用をしていることがわかる。その意味では、コリャーク語は (8) の英語の Dative Shift の例のように動詞の側に充当相化を示唆するマーカ―が全くない言語とは異なる。以上から、コリャーク語は専用の充当相マーカ―は持たないが、統語的には他動詞化していることが標示されているため、広義の充当相を有すると判断する（これについての詳細な議論は、2. 3. でおこなう）。

¹ Peterson (2007) では、動詞の側に明示的な充当相標識があるものに限定しているにもかかわらず、チュクチ語に benefactive, goal, allative, locative, instrumental などの充当相があるとしている。これは、おそらく使役の r-/n- や逆受動の ine-/ena-を充当相マーカ―としている Dunn (1999) に依拠しているためであろうと考えられる。

2.2. 斜格名詞の意味役割

コリャーク語では、受益者 (benefactive) を表わす与格名詞の充当相化が最も一般的である。ただし、場所 (location) を表わす場所格名詞や方向 (direction) を表わす方向格名詞の充当相も見られる。加えて、奪格名詞 (ablative) か所有者 (possessor) かが明確でない例も見られる。

(10) 受益者 (与格)

- a. əlla-Ø ku-te-peŋke-ŋ-ə-ŋ-Ø kəmeŋ-ə-ŋ.
mother-ABS.SG IPF-make-hat-make-E-IPF-3SG.S child-E-DAT
- b. əllɿ-a kəmiŋ-ə-n ku-te-peŋke-ŋ-ə-ŋ-ni-n.
mother-INS(ERG) child-E-ABS.SG IPF-make-hat-make-E-IPF-3SG.A-3SG.O
「母は子供のために帽子を縫っている／いた」

(11) 場所 (場所格)

- a. en'pici-te cajotqəjɔl'ɣ-ə-l'q-ə-k ɣa-ntəval-len-Ø
father-INS(ERG) table-E-surface-E-LOC RES-put-3SG.O-3SG.A
kojŋ-ə-n.
cup-E-ABS.SG
- b. en'pici-te cajotqəjɔl'ɣəl'-ə-n ɣa-kojŋ-ə-ntəval-len-Ø.
father-INS(ERG) table-E-ABS.SG RES-cup-E-put-3SG.O-3SG.A
「父はテーブルにコップを置いた」

(12) 方向 (方向格)

- a. ɣəm-nan t-ə-nnij-ə-n-Ø wojv-etəŋ kinuŋi-Ø.
1SG-ERG 1SG.A-E-send-E-3SG.O-PF village-ALL meat-ABS.SG
- b. ɣəm-nan wojv-ə-n t-ə-kinuŋva-nnij-ə-n-Ø.
1SG-ERG village-E-ABS.SG 1SG.A-E-meat-send-E-3SG.O-PF
「私は村に肉を送った」

(13b) は奪格名詞の充当相なのか、所有者の stranding (Baker 1988:96) なのかが判断できない例である。ちなみに、コンサルタントは、対応する非充当相構文では奪格でも所有格でも可能であるとしている²。

² 呉人徳司氏 (p.c.) によれば、チュクチ語では、次のように奪格名詞の充当相化としてとらえられているようである。

- (a) ətləɣ-e akka-jpə maneman itke-ni-n-Ø.
father-INS(ERG) son-ABL money(ABS.SG) take-3SG.A-3SG.O-PF
- (b) ətləɣ-e ekək-Ø manc-etka-ne-n-Ø.
father-INS(ERG) son-ABS.SG money-take-3SG.A-3SG.O-PF
「父は息子からお金を取った」

(13) 奪格名詞？所有者？

- a. $\gamma\text{əm-nan}$ $\text{t-ekmit-ə-n-}\emptyset$ $\text{ənma-na-}\eta\text{qo}$ / ənma-nən
 1SG-ERG 1SG.A-take-E-3SG.O-PF mommy-AN.SG-ABL mommy-POSS
 $\text{tew}\zeta\text{el-}\emptyset$.
 dried.fish-ABS.SG
- b. $\gamma\text{əm-nan}$ $\text{ənma-}\emptyset$ $\text{t-ə-tew}\zeta\text{el-ekmit-ə-n-}\emptyset$.
 1SG-ERG mommy-ABS.SG 1SG.A-E-dried.fish-take-E-3SG.O-PF
 「私は母さんから／母さんの干し魚を取った」

ただし、仮に (13b) で抱合された名詞が所有者であっても、充当相とはみなせない。なぜならば、所有者がこのように動詞に抱合された被所有物と別に表わされるのは、(13b) のような他動詞文だけでなく、(14b) のように所有者が主語となる自動詞文でも可能であるからである。

(14) 自動詞文における所有者の Stranding

- a. $\gamma\text{əm-nin-}\emptyset$ $\text{mənyəl}\eta\text{-ə-n}$ $\text{tənut-i-}\emptyset$.
 1SG-POSS-ABS.SG hand-E-ABS.SG swell.up-PF-3SG.S
 「私の手が腫れた」
- b. $\gamma\text{əmmo}$ $\text{t-ə-məny-ə-not-ə-k-}\emptyset$.
 1SG.ABS 1SG.S-E-hand-E-swell.up-E-1SG.S-PF
 「私は手が腫れた」

2.3. 他動詞性

充当相は自動詞語幹からも他動詞語幹からも形成されるが、いずれの場合でも、他動詞文となる。ただし、その際、上述のとおり、自動詞語幹が主語と目的語の 2 項標示を受ける他動詞活用をするという奇妙な操作がおこなわれる。すなわち、充当相が自動詞語幹から形成される場合には、他動詞語幹に派生されることなく、自動詞語幹のまま他動詞活用する。一方、他動詞語幹から形成される場合には、2 つの目的語が絶対格を取ることは許容されないため、元の目的語は動詞に抱合される。通常、目的語が他動詞に抱合されると自動詞語幹が派生され、自動詞活用する。しかし、充当相では自動詞語幹のまま他動詞活用する。

以下では、最も一般的な受益者の充当相構文を中心に、このような奇妙な統語的ふるまいについて見ていく。

まず、自動詞語幹から形成される受益者の充当相の例についてみる。(15a)(16a) は受益者が与格で現れる非充当相の自動詞文である。(15b)(16b) は (15a)(16a) に対応する充当相化された他動詞文である。

- (15) a. $\text{kəmi}\eta\text{-ə-n}$ $\text{ja-pecy-ə-}\eta\text{ta-}\eta\text{-}\emptyset$ $\text{an'pec-ə-}\eta$ $\text{vojv-ə-}\eta\text{qo}$
 child-E-ABS.SG FUT-food-E-bring-FUT-3SG.S father-E-DAT village-E-ABL

- b. kəmiŋ-a ja-pecy-ə-ŋta-ŋ-ne-n en'pic-Ø
 child-INS(ERG) FUT-food-E-bring-FUT-3SG.A-3SG.O father-ABS.SG
 wɔjv-ə-ŋqo.
 village-E-ABL

「子供は父親のために村から食料を取ってくるだろう」

- (16) a. əllɜ-a ku-te-peŋke-ŋ-ə-ŋ-Ø kəmeŋ-ə-ŋ.
 mother-INS(ERG) IPF-make-hat-make-E-IPF-3SG.S child-E-DAT
 b. əlla-Ø kəmiŋ-ə-n ku-te-peŋke-ŋ-ə-ŋ-ni-n.
 mother-ABS.SG child-E-ABS.SG IPF-make-hat-make-E-IPF-3SG.A-3SG.O
 「母親は子どものために帽子を作っている／いた」

(15a)(15b) の動詞語幹 pecy-ə-ŋta 「食料を取ってくる」は、自立名詞 pecy 「食料」に、「取ってくる」の意味の出名動詞派生接尾辞 -ŋta が付加された自動詞語幹である。(16a)(16b) の動詞語幹 te-peŋke-ŋ も同様に、自立名詞 peŋke 「帽子」に「作る」の意味の出名動詞派生接尾辞 te-...-ŋ が付加された自動詞語幹である（呉人恵 2001）。したがって、(15b)(16b) で pecy-ə-ŋta, te-peŋke-ŋ が他動詞化しないまま、主語と目的語が標示される他動詞活用をしているのは、いわば一般的な統語制約に対する違反である。

次に充当相が他動詞語幹から形成される例を見る。この充当相に特徴的なのは、上述のようにコリャーク語では 2 つの名詞項が同時に目的語として絶対格を取ることが許容されないため、斜格名詞は絶対格に昇格し、元の目的語は他動詞語幹に抱合される点である。(17a) は、受益者が与格で現れる他動詞文である。(17b) では、(17a) で与格を取る jamkəlɜ 「客」が絶対格に昇格するとともに、元の目的語 təllətəl 「扉」が他動詞語幹 nweŋet 「開く」に抱合されている。

- (17) a. ɣəm-nan jamkəlɜ-ə-ŋ t-ə-nweŋet-ə-n-Ø təllətəl.
 1SG-ERG guest-E-DAT 1SG.A-E-open-E-3SG.O-PF door(ABS.SG)
 b. ɣəm-nan jamkəlɜ-ə-n t-ə-təll-ə-nwaŋat-ə-n-Ø.
 1SG-ERG guest-E-ABS.SG 1SG.A-E-door-E-open-E-3SG.O-PF
 「私は客のために扉を開けた」

通常、他動詞語幹に目的語が抱合されると、自動詞活用をする。目的語が抱合されず分析的に表わされている (18a) が他動詞活用するのに対し、目的語が抱合された (18b) が自動詞活用していることに注意されたい。

- (18) a. ɣəm-nan t-ə-mle-n-Ø uttəut.
 I-ERG 1SG.S-E-break-3SG.O-PF stick(ABS.SG)
 b. ɣəmmo t-utt-ə-mle-k-Ø.
 I(ABS) 1SG.S-stick-E-break-1SG.S-PF

「私は木を折った」

ところが、(17b) では同じく他動詞語幹に目的語が抱合されているにもかかわらず、動詞は他動詞活用していることから、充当相が他動詞語幹から形成される場合も、一般的な統語制約に対する違反を犯していることがわかる。

もうひとつ他動詞語幹から形成される例を見る。(19a) では、自立の他動詞語幹 *tejk* 「作る」が用いられている。一方、(19b) では、自立動詞と同じ意味を表わす語彙的接辞がある場合には、自立動詞による抱合はおこなわれず、代わりにその語彙的接辞により出名動詞が作られるという一般的制約により、*tejk* の代わりに同じ語彙的意味を表わす *te...-ŋ* が目的語と結合して自動詞語幹を形成している（自立動詞語幹と語彙的出名動詞形成接辞との相関関係については Kurebito 2001, 呉人恵 2001 を参照）。

- (19) a. *əlla-Ø* *yəmk-ə-ŋ* *tejk-ə-ni-n-Ø* *n-ə-mejŋ-ə-qin*
 mother-INS(ERG) 1SG-E-DAT make-E-3SG.A-3SG.O-PF PRP-E-big-E-ABS.SG
 ʕel'uci-Ø.
 doll-ABS.SG
- b. *əllʕ-a* *yəmmo* *ine-te-mejŋ-ə-ʕel'uci-ŋ-i-Ø*.
 mother-INS(ERG) 1SG.ABS 1SG.O-make-big-E-doll-make-PF-3SG.A
 「母は私のために大きな人形を作ってくれた」

以上のように、自動詞語幹から形成される場合も、他動詞語幹から形成される場合も、派生されるのは自動詞語幹であり、それが他動詞活用をする。この制約違反こそが、コリヤーク語の充当相を特徴づけているといえる。

ちなみに、チュクチ語でも同様に、充当相化において自動詞語幹が他動詞活用している例が報告されている（呉人徳司 2009:115）。(20a) は自動詞語幹から形成された非充当相の例である。対応する (20b) の充当相でも、この自動詞語幹はそのまま保持され、他動詞活用している³。

- (20) チュクチ語
- a. *əllʔa-Ø* *tipʔejŋ-yʔi-Ø* *nana-ytə*.
 mother-ABS.SG sing-3SG.S-PF child-DAT
- b. *əllʔa-ta* *tipʔejŋ-ni-n-Ø* *nenenə-Ø*.
 mother-INS(ERG) sing-3SG.A-3SG.O-PF child-ABS.SG
 「母は子供のために歌った」

一方、他動詞語幹から形成される充当相の場合に、コリヤーク語とチュクチ語で違いが出るところがある。それは、充当相における脱他動詞化接尾辞 *-et* の出現に関してである。Spencer (1995) は、チュクチ語では脱他動詞化接尾辞 *-et* が保持されている (21b) のような例

³ コリヤーク語では、同様の「歌う」の充当相化は許容されない。

は、充当相化をブロックするため、許容されないとしている。

- (21) a. ətləy-ə-n akka-γtə qaa-nm-at-γʔe-Ø.
 father-E-ABS.SG son-DAT reindeer-kill-DTR-PF-3SG.S
 b. *ətləy-e ekək-Ø qaa-nm-an-ne-n-Ø.
 father-INS(ERG) son-ABS.SG reindeer-kill-DTR-3SG.A-3SG.O-PF
 「父は息子のためにトナカイを殺した」

呉人徳司氏 (p.c.) による (22b) でも、たしかに -et は充当相化に際して削除されている。(22a) は目的語が分析的に表わされている例、(22b) は目的語が抱合されている例、(22c) は充当相の例である。(22b) では、目的語が抱合される際に -et が付加され自動詞化しているのに対し、(22c) では目的語は抱合されているが -et が削除されていることに注目されたい。

- (22) a. ətləy-e təyinr-ə-ni-n-Ø umkuum akka-γtə.
 father-INS(ERG) pull.out-E-3SG.A-3SG.O-PF stick(ABS.SG) son-DAT
 b. ətləy-ə-n umk-ə-təyinr-et-γʔi-Ø akka-γtə.
 father-E-ABS.SG stick-E-pull.out-DTR-3SG.S-PF son-DAT
 c. ətləy-e umk-ə-təyinr-ə-ni-n-Ø ekək-Ø.
 father-INS(ERG) stick-E-pull.out-E-3SG.A-3SG.O-PF son-ABS.SG
 「父は息子のために木を引き抜いた」

これに対して、コリャーク語では充当相構文においても、-et は脱落しない。(23a)(24a) は分析形、(23b)(24b) は充当相である。

- (23) a. an'pec-ə-ŋ qoja-ŋa t-ə-nm-ə-n-Ø.
 father-E-DAT reindeer-ABS.SG 1SG.A-E-kill-E-3SG.O-PF
 b. en'pic-Ø t-ə-qoja-nm-at-ə-n-Ø.
 father-ABS.SG 1SG.A-E-reindeer-kill-DTR-E-3SG.O-PF
 「私は父のためにトナカイを殺した」

- (24) a. an'pec-ə-ŋ t-ə-pj-ə-n-Ø uttəut.
 father-E-DAT 1SG.A-E-pull.out-E-3SG.O-PF stick(ABS.SG)
 b. en'pic-Ø t-utt-ə-pj-et-ə-n-Ø.
 father-ABS.SG 1SG.A-stick-E-pull.out-DTR-E-3SG.O-PF
 「私は父のために木を引き抜いた」

このことから、コリャーク語ではチュクチ語よりも自動詞語幹が他動詞活用するという制約違反が一貫していることがうかがえる。

3. S=A 交替

S=A 交替は、主要項を斜格に降格させ、結合価の減少を引き起こす手段である。コリャーク語の S=A 交替は、①逆受動化接辞、②自他同形動詞、③補充法、④名詞抱合、⑤語彙的意味を持つ出名動詞形成接辞によって操作される（呉人恵 2014）。このうち、O が削除されたり斜格化（道具格、場所格、方向格、与格）したりするのは、①②③の場合である。さらに、(3)(4) で見たように派生の方向が判定しにくいために充当相と混同されやすいのが、②の自他同形動詞の場合である。jejol「理解する／～を理解する」、pəŋlo「尋ねる／～に尋ねる」、valom「聞く／～を聞く」、uŋet「待つ／～を待つ」などの動詞がこれに該当する⁴。これらは他動詞文として用いられる場合には、能格の他動詞主語と、絶対格の目的語を取る。一方、自動詞文として用いられる場合には、他動詞主語は絶対格の自動詞主語に交替し、目的語は与格に降格する。

ところで、Kozinsky et al. (1988) は、チュクチ語の同様の降格（ただし、方向格はなし）について、道具格はすでに存在している目的語を表わす場合、場所格は目的語の位置の含意がある場合、与格は目的語がまだ存在していないものの場合にそれぞれ選択されるとしている。しかし、そのような選択条件は必ずしもすべての例にあてはまるわけではない。コリャーク語の場合、どの格形式をとるのかには、むしろ、被動作性が関与している可能性がある。Tsunoda (1981, 1985) は、動作が動作対象に及ぶ程度（被動作性）と格枠組みには相関性があるとし、二項述語を被動作性の高い順に、「直接影響」>「知覚」>「追求」>「知識」>「感情」>「関係」のように階層化している。すなわち、階層が高い動詞はより典型的な他動詞文の格枠組みを取るのに対し、低い動詞では異なる格枠組みが現れるとする。呉人恵 (2014) では、このような被動作性の階層はコリャーク語では S=A 交替において、どの斜格を選択するか基準にもなっており、被動作性の高い順から、O は削除>道具格>場所格>方向格>与格が選択される可能性があることを指摘している。

上述の jejol「理解する／～を理解する」、pəŋlo「尋ねる／～に尋ねる」、valom「聞く／～を聞く」、uŋet「待つ／～を待つ」といった自他同形動詞は、被動作性の最も低い動詞にあたり、自動詞として用いられる場合には、次の (25b)(26b) で見るように、被動作者は与格名詞を取る。

- (25) a. kalicit-ə-lŋ-ə-n en'pici-te ɣ-uŋel-lin-Ø.
study-E-PART-E-ABS.SG father-INS(ERG) RES-wait-3SG.O-3SG.A
- b. en'pic-Ø ɣ-uŋel-lin kalicit-ə-lŋ-ə-ŋ.
father-ABS.SG RES-wait-3SG.S study-E-PART-E-DAT
「父親は学生を待った」

⁴ 一方、S=O 交替にかかわる自他同形動詞として、məcetku「(ばらばらに) 折れる」「折る」、məle「折れる」「折る」、cəŋat「割れる」「割る」、wanjojp「開く」、ŋəvo「始まる」「始める」、pəl'ətku「終わる」「終える」などがある。

- (26) a. tata-na-k yəmmo ena-valom-e-Ø.
daddy-AN.SG-LOC(ERG) 1SG.ABS 1SG.O-listen-PF-3SG.A
- b. tata-Ø yəmkən valom-e-Ø.
daddy-ABS.SG 1SG.DAT listen-PF-3SG.S
「お父さんは私の言うことを聞いた」

これらの自他同形動詞は、(3)(4) でも見たように、主要項の取る名詞の格や、動詞の形式において、一見、充当相と酷似している。しかしながら、両者は動詞の統語的ふるまいが次の点で根本的に異なる。すなわち、充当相における動詞語幹は、対応する非充当相の動詞語幹と同形ではあるが、これはそれが自他同形動詞であるためではなく、統語制約に対する違反のためである。したがって、充当相の動詞語幹は充当相以外の構文では、自動詞としてしかふるまわない。(4a)(4b) であげた *kukejv* 「料理する」を例にとると、自動詞活用している (27a) は適格文であるが、他動詞活用している (27b) は非文となる。

- (27) a. $\gamma\text{əmmo}$ kinuŋva-ta $\text{t-ə-kukejv-ə-k-}\emptyset$.
 1SG.ABS meat-INS 1SG.S-E-boil-E-1SG.S-PF
 b. $*\gamma\text{əm-nan}$ $\text{kinuŋi-}\emptyset$ $\text{t-ə-kukejv-ə-n-}\emptyset$.
 1SG-ERG meat-ABS.SG 1SG.A-E-boil-E-3SG.O-PF
 「私は肉を煮た」

これに対し、S=A 交替で自他同形動詞が自動詞活用することも他動詞活用することも可能なのは、(25a)(25b)(26a)(26b)で見たとおりである。これらはむしろ、同じく与格名詞を取る次のような逆受動構文と平行している。(28a) は *nyəjulev* 「教える」による他動詞文、(28b) は *nyəjulev* に逆受動化接辞 *ine-* が付加された逆受動文 (= 自動詞文) である (すでに挙げた (2a)(2b) のペアも同様)。

- (28) a. *ecyi* *ɣəm-nan* *t-ə-ko-nyəjulev-ə-ŋ-ə-n*
 now 1SG-ERG 1SG.A-E-IPF-teach-E-IPF-E-3SG.O
cawcəva-jeləjel *majŋ-ə-kale-ja-k.*
 reindeer.herder-tongue(ABS.SG) big-E-write-house-LOC
- b. *ecyi* *ɣəmmo* *t-ə-k-ine-nyəjulev-ə-ŋ* *cawcəva-jel-ə-ŋ*
 now 1SG.ABS 1SG.S-E-IPF-AP-teach-E-IPF reindeer.herder-tongue-E-DAT
majŋ-ə-kale-ja-k.
 big-E-write-house-LOC
- 「私は今、大学でコリャーク語を教えている」

以上から、充当相と自他同形動詞による S=A 交替は、統語的ふるまいにおいて明確に区別されうるものであると考える。

4. 授与動詞

授与動詞には、jəl, nqeviv などがある。jəl はニュートラルな「与える」の意味、nqeviv は「(贈りものとして) 与える」の意味である。これらが移動動詞と一見ふるまいが類似していることは、すでに (5)(6) で見たとおりである（下に再掲）。

(29)=(5) vava-na-k kəmeŋ-ə-ŋ ye-nqeviw-linet-Ø mitʃajina-t
 granma-AN.SG-LOC(ERG) child-E-DAT RES-give-3DU.O-3SG.A beautiful-ABS.DU
 penke-t.
 hat-ABS.DU
 「おばあさんは子どもに 2 つの美しい帽子をあげた」

(30)=(6) vava-na-k kəmeŋ-ə-ŋ ye-lle-linet-Ø mitʃajina-t
 granma-AN-LOC(ERG) child-E-DAT RES-carry-3DU.O-3SG.A beautiful-ABS.DU
 penke-t.
 hat-ABS.DU
 「おばあさんは子どもに 2 つの美しい帽子を持って行った」

しかし、両者は次の 2 点において明確に区別される。

- ① 授与動詞では動詞に標示される項が人称によって異なる。すなわち、名詞句階層の上位にある 1 人称、2 人称が間接目的語の場合には、これが、動詞に標示される。一方、3 人称が間接目的語の場合には、直接目的語が動詞に標示される。これに対し、移動動詞では、動詞に標示されるのは人称に関係なく常に直接目的語である。
- ② 授与動詞は充当相化できないが、移動動詞は充当相化できる。

授与動詞の統語的ふるまいを図式化すると、次の 2 つのパターンがあることになる (R は recipient 「受益者」の略)。

I.	1 人称・2 人称	<table><tr><td>V_{-A+R}</td><td>A_(ERG)</td><td>R_(DAT)</td><td>O_(ABS)</td></tr></table>	V _{-A+R}	A _(ERG)	R _(DAT)	O _(ABS)
V _{-A+R}	A _(ERG)	R _(DAT)	O _(ABS)			
II.	3 人称	<table><tr><td>V_{-A+O}</td><td>A_(ERG)</td><td>R_(DAT)</td><td>O_(ABS)</td></tr></table>	V _{-A+O}	A _(ERG)	R _(DAT)	O _(ABS)
V _{-A+O}	A _(ERG)	R _(DAT)	O _(ABS)			

まず、jəl 「与える」を例に両者の違いを見る。(31) は R が 1 人称単数、(32) は 1 人称複数の例、(33) は 2 人称単数、(34)(35) は R が 3 人称単数、O が 3 人称複数の例である。

(31) əccaj-ə-na-k k-ena-jəl-ŋəvo-ŋ-Ø yəmk-ə-ŋ
 aunt-E-AN.SG-LOC(ERG) IPF-1SG.O-give-HAB-IPF-3SG.A 1SG-E-DAT
 naly-ə-tʃul-u.
 fur.skin-E-piece-ABS.PL
 「叔母さんは私に毛皮の切れ端をくれた」

- (32) qejmen mojk-ə-ŋ na-ko-jəl-la-mək qəleva-w.
 once 1PL-E-DAT INV-IPF-give-PL-1PL.O bread-ABS.PL
 「ある時、彼らは私たちにパンをくれた」
- (33) yəm-nan ənəkəjep t-ə-jəl-yi-Ø yənk-ə-ŋ pəlwənt-o.
 1SG-ERG before 1SG.A-E-give-2SG.O-PF 2SG-E-DAT money-ABS.PL
 「私は以前、あなたにお金をあげた」
- (34) yəm-nan tewʃel-u kəmeŋ-ə-ŋ t-ə-jəl-new-Ø.
 1SG-ERG dried.fish-ABS.PL 3SG-E-DAT 1SG.A-E-give-3PL.O-PF
 「私は干し魚を子供にあげた」
- (35) waca ənn-u ənk-ə-ŋ mət-ku-jəl-ŋ-ə-new.
 sometimes fish-ABS.PL 3SG-E-DAT 1PL.A-IPF-give-IPF-E-3PL.P
 「私たちは時には魚を彼にあげた」

もう一つの授与動詞 jəqeviv 「贈る」は、(36) で見るように自動詞 qevi 「手に入れる」に使役の接周辞 j-...-v が接続した形式である。

- (36) yəmmo t-ə-qevi-k-Ø picy-e wujv-ə-k.
 1SG(ABS) 1SG-E-get-1SG.S-PF food-INS village-E-LOC
 「私は村で食料を手に入れた」

jəqeviv 「贈る」も、jəl と同様にふるまう。(37) は R が 1 人称複数、(38) は 2 人称単数、(39) は 3 人称単数、(40) は 3 人称複数の例である。

- (37) vava-na-k mojk-ə-ŋ ne-nqeviw-mək-Ø mitʃajina-w
 grandma-AN.SG-LOC(ERG) 1PL-E-DAT INV-present-1PL.O-PF beautiful-ABS.PL
 peŋke-w.
 hat-ABS.PL
 「おばあさんは私達に美しい帽子を贈ってくれた」
- (38) ajatyŋ-ə-na-k yənk-ə-ŋ ne-nqeviw-wi-Ø
 Ajatginin-E-AN.SG-LOC(ERG) 2SG-E-DAT INV-present-2SG.O-PF
 luqi-ʃəʈʃ-ə-n.
 black-dog-E-ABS.SG
 「アヤトギーニンはあなたに黒い犬を贈った」

- (39) *yəm-nan əməŋ jej-u t-ə-ko-nqavew-ŋəvo-ŋ-naw.*
 1SG-ERG all what-ABS.PL 1SG.A-E-IPF-present-HAB-IPF-3PL.O
el'ŋa-tomy-ə-ŋ.
 woman-friend-E-DAT
 「私は女友達に何でもすべてを贈っている／いた」
- (40) *en'pici-te kəmeŋ-ə-jək-ə-ŋ ye-nqeviw-linet-Ø mitʃajina-t*
 father-INS(ERG) child-E-AN.PL-E-DAT RES-present-3DU.O-3PL.A beautiful-ABS.DU
peŋke-t.
 hat-ABS.DU
 「父親は子供たちに二台の美しい櫓を贈った」

一方、*jet*「持って来る」、*lle*「持って行く」、*nnij*「送る」などの移動動詞には、受益者の人称にかかわらず、直接目的語が標示される。また、充当相化することも可能である。(41a) は *jet*「持って来る」の間接目的語が1人称単数の場合である。動詞には直接目的語が標示されている。また、(41b)のように充当相化することができる。(42a)(42b) は *lle*「持って行く」の例、(43a)(43b) *nnij*「送る」の例である。

- (41) a. *en'pici-te jet-ə-ne-n-Ø yəmk-ə-ŋ ŋelvəlŋ-ə-k*
 father-INS(ERG) bring-E-3SG.A-3SG.O-PF 1SG-E-DAT reindeer.herd-E-LOC
va-lŋ-ə-n qoja-ŋa.
 exist-PART-E-ABS.SG reindeer-ABS.SG
- b. *en'pici-te yəmmo ena-qoja-jat-e-Ø ŋelvəlŋ-ə-ŋqo.⁵*
 father-INS(ERG) 1SG.ABS 1SG.O-reindeer-bring-PF-3SG.O reindeer.herd-E-ABL
 「父は私のために群れからトナカイを連れてきた」
- (42) a. *yəm-nan m-ə-lle-n mətqəmət ijk-ə-ŋ.*
 1SG-ERG OPT.1SG.A-E-carry-3SG.O fat(ABS.SG) 3PL-E-DAT
- b. *yəm-nan əccu m-ə-mətk-ə-lle-new*
 1SG-ERG 3PL.ABS OPT.1SG.A-E-fat-E-carry-3PL.O
 「私は彼らに（トナカイの）脂肪を持って行こう」
- (43) a. *yəm-nan t-ə-nnij-ə-n-Ø kəmeŋ-ə-ŋ kinuŋi-Ø.*
 1SG-ERG 1SG.A-E-send-E-3SG.O-PF child-E-DAT meat-ABS.SG
- b. *yəm-nan kəmiŋ-ə-n t-ə-kinuŋva-nnij-ə-n-Ø.*
 1SG-ERG child-E-ABS.SG 1SG.A-E-meat-send-E-3SG.O-PF

⁵ (41a) では *ŋelvəlŋ-ə-k va-lŋ-ə-n qoja-ŋa*「群れにいるトナカイ」と、分詞による名詞修飾節により「トナカイ」が修飾されているが、(41b) では「トナカイ」が動詞に抱合されており、「トナカイ」を修飾できないために、代わりに *ŋelvəlŋ-ə-ŋqo*「群れから」としたものと考えられる。

「私は子供に肉を送った」

ところで、授与動詞には統語的ふるまいの異なるもう一つのタイプがある。このタイプでは動作主は能格、受益者は絶対格、被動作主は道具格で表わされ、動詞には A と R の人称が標示される。pəŋj という他動詞がこれに該当する。(44a) は、受益者が目的語として絶対格を取っており、充当相とも類似しているが、(44b) のような対応する非充当相構文は非文であることから、受益者の充当相とみなすことはできない。

- (44) a. vava-na-k ko-lpəŋj-ə-ŋ-ne-n kanpet-a
 grandma-AN.SG-LOC(ERG) IPF-distribute-E-IPF-3SG.A-3SG.O candy-INS
 kəmiŋ-ə-n.
 child-E-ABS.SG
- b. vava-na-k kəmiŋ-ə-ŋ ko-lpəŋj-ə-ŋ-new-Ø
 grandma-AN.SG-LOC(ERG) child-E-DAT IPF-distribute-E-IPF-3PL.O-3SG.A
 kanpeta-w.
 candy-ABS.PL
 「おばあさんは遊んでいる子供達にキャンディを分け与えている／いた」

5. おわりに

本稿では、与格名詞がかかわる充当相を、これと混同しやすい自他同形動詞の S=A 交替、授与動詞と比較し、相互の異同について検討した。その結果、次の点が明らかになった。

- (A) コリャーク語の充当相構文は、自動詞語幹が他動詞活用するという制約違反の操作によって形成される。
- (B) 充当相構文と対応する非充当相構文の動詞語幹が同形となることがあるのは、自他同形動詞であるためでなく、(A) の違反によるものである。したがって、充当相は自他同形動詞の S=A とは、見かけ上の類似にもかかわらず明確に区別される。
- (C) 受益者が与格を取る授与動詞は、人称によって動詞の標示が異なる、充当相構文を作れないなど、他の移動動詞をはじめとする動詞との見かけ上の類似にもかかわらず、明確に区別される。

なぜ充当相の動詞が、自動詞語幹なのに他動詞活用をするという制約違反を犯すのか、その理由の解明は、今後の課題としたい。

略号

A=agent-like argument (transitive subject), ABL=ablative, ABS=absolutive, ALL=allative, AN=animate, AP=antipassive, DAT=dative, DTR=detransitivizer, DU=dual, E=epenthetic, ERG=ergative, HAB=habitual, INS=instrumental, INV=inverse, IPF=imperfective, LOC=locative,

O=object, OPT=optative, PART=participle, PF=perfective, PL=plural, POSS=possessive, PRP=property predication, RES=resultative, S=single argument (intransitive subject), SG=singular

参考文献

- Baker, Mark C. (1988) *Incorporation: a Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dunn, Michael John (1999) *A Grammar of Chukchi*. A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy of Australian National University.
- Kozinsky, Isaac. Sh., Vladimir P. Nedjalkov, and Maria S. Polynskaja (1988) Antipassive in Chukchee: Oblique Object, Object Incorporation, Zero Object. In: M. Shibatani (ed.) *Passive and Voice*, 651-706. Amsterdam: John Benjamins.
- 呉人恵 (2001) 「コリヤーク語の出名動詞と名詞抱合」 津曲敏郎編『環北太平洋の言語』7: 101-124. 札幌：北海道大学大学院文学研究科.
- 呉人恵 (2013) 「コリヤーク語動詞の自他対応 ―中立型か他動詞化型か―」『北方言語研究』3: 85-109.
- 呉人恵 (2014) 「コリヤーク語における S=A 交替」『北方人文研究』7: 25-53.
- Kurebito, Megumi (2001) Noun Incorporation in Koryak. In: Osahito Miyaoka and Fubito Endo (eds.), *Languages of the North Pacific Rim* 6 (ELPR A2-001), 29-58.
- Kurebito, Megumi (ed.)(2014) *Koryak Text 1*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, Megumi (ed.)(2016) *Koryak Text 2*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, Megumi (ed.)(2017) *Koryak Text 3*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, Megumi (ed.)(2018) *Koryak Text 4*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- 呉人徳司 (2009) 「チュクチ語の結合価の変更について」『アジア・アフリカの言語と言語学』4:111-132.
- Peterson, David A. (2007) *Applicative Constructions*. Oxford: Oxford University Press.
- Polinsky, Maria (2005) Applicative Constructions. In: M. Haspelmath, M.S. Dryer, D. Gil, and B. Comrie (eds.) *The World Atlas of Language Structures*: 442-445. Oxford: Oxford University Press.
- Spencer, Andrew J. (1995) Incorporation in Chukchi. *Language* 71(2): 439-489.

On Some Morphosyntactic Phenomena of Dative Noun in Koryak:
Applicative, S=A alternation, and Benefactive Verbs

Megumi KUREBITO
(University of Toyama)

The present paper examines the similarities and dissimilarities between the benefactive applicative construction where the recipient in the dative case becomes the target of applicativization, and other phenomena such as S=A alternation of labile verb and the benefactive verbs. As a result it points out the followings;

- (A) Koryak applicative construction is formed through violation against the normal grammatical constraint, that is, transitive conjugation of the intransitive stem.
- (B) The fact that the verb of applicative construction and that of the corresponding non-applicative construction are the same does not mean that it is a labile verb which can be used both as intransitive and transitive as in S=A alternation, but it shows that it is due to the abovementioned violation. Therefore the applicative can be clearly distinguished from S=A alternation of labile verb in spite of the apparent similarities.
- (C) The benefactive verb with the recipient in the dative case is clearly distinguished from the applicative in that it has a different person marking according to the animacy hierarchy and that it cannot derive the applicative.

Clarification of the reason why the applicative verb violates the grammatical constraint remains open for the future study.

(くれびと・めぐみ kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp)